その他地方紙に掲載中

文化

土地の記憶 人の記録 下

人類史に残す等身大の言葉

71人が詳細に・慟哭の記録出版

被災者本人がつづるリアル

560ページに詰め込まれた50万字に及ぶ言葉。今年2月に刊行された「3・11慟哭の記録」（新曜社）＝写真＝は、東日本大震災を記録する数多くの書籍の中でも他と一線を画す。ジャーナリストのルポでも、研究者による聞き書きでもない。岩手、宮城、福島県などの被災者71人が、自身の体験を詳細につづっている。

「被災の現場で何が起こっていたのか。その時の混乱も含めて、一人一人の目線でダイレクトに体験を書いてもらった」。同書の編者で東北学院大（仙台市）の准教授金菱清は言う。ゼミ生ら10人とプロジェクトチームを組み、大学のネットワークをたどりながら被災者たちの原稿を集めた。

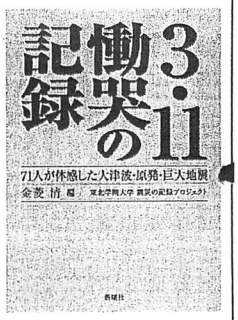
津波の描写も多様

宮城県石巻市の大川小で娘を失った母親の懸命の捜索、ヘルパーの仕事中に津波にのみ込まれた女性、原発事故を機にニート生活から脱した男性…。それぞれ様相の異なる体験と視点から描かれる。「富士山を横に伸ばしたよう」「黒いものがモジャモジャと」。津波の描写も多様だ。自身は目撃しなかった津波で家族を失った女性は「正体不明の『つなみ』というものが悲しみだけを残していった」と記した。

「聞き書きだと、聞き手が聞きたいことだけの内容になる。前後の文脈が見えづらく、被災者が体験の中で何を重視しているかも分からない」

被災者自らが書くことにこだわった金菱の原点には、生まれ育った大阪で体験した阪神大震災がある。「マスメディアは横倒れになった高速道路や火災現場の上空からの映像ばかりを流し、その下で人々がどう生きたのかがまったく伝わってこなかった」

今回の震災でも津波の空撮映像がくり返し流され、イメージを決定づけた。「圧倒的な映像でかき消された小さな声、本人が描くディテールにこそ震災のリアリティーがある」。写真を一切載せなかったのも、言葉そのものへの信頼を取り戻す意図が込められている。



震災後の混乱と悲しみの中で、遺族らは何を思い、手記を書いたのか。

チームに参加した同大2年の渡辺英莉（20）も筆者のひとりだ。宮城県七ケ浜町の自宅の裏山で津波に襲われ、祖母とつないだ手をはなしてしまった。祖母は数日後、遺体で見つかった。

避難先のアパートで家族が寝静まった深夜、パソコンに向かった。震災当日に祖母と食べたケーキ、目の前で津波に押しつぶされた自宅、そして手がはなれた瞬間のこと。祖母の死は「私のせいだ」と自分を責め続けた。

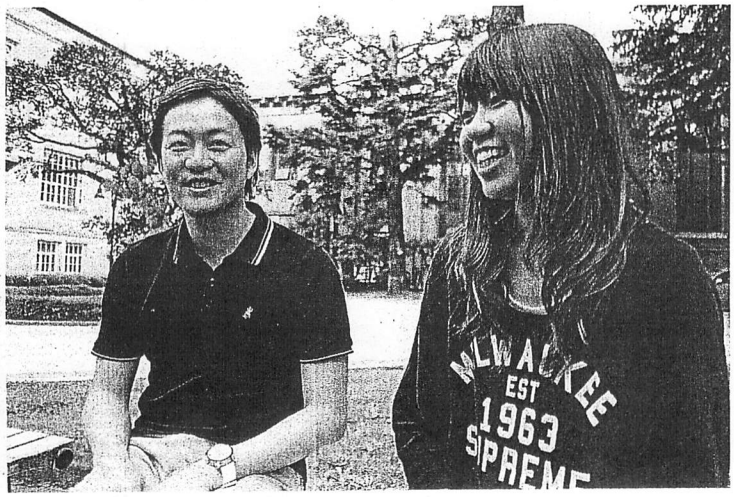
私しか知らない

「書き始める前には、いつも涙がこぼれた。でも、やり遂げたいという思いの方が強かった。おばあちゃんの最期を知っているのは他の誰でもない。私が書くんだって」

津波で亡くした27歳の息子のことをつづった同大職員の小原武久（56）も「この本は息子への弔い。一生、何かあるたびに読み返すと思う」と、執筆の意味をかみしめる。

未曽有の災害をどう記録し、後世に伝えていくか。被災地での試みは始まったばかりだ。金菱は本書の前書きで「世界の読者のみなさまへ」と呼び掛けている。なぜなら一人として同じではない被災者たちの等身大の言葉は、「人類史の記録」として大きな意味を持つのだから。

（敬称略）



「3・11慟哭の記録」を編んだ金菱清准教授（左）と渡辺英莉さん＝仙台市の東北学院大

「かわいい」の強さを再発見

軌跡たどる金沢21世紀美術館の試み

ティーン誌・オリーブ

ティーン誌「オリーブ」のバックナンバー

約20年にわたり個性的なファッションを少女たちに提案したティーン誌「オリーブ」（マガジンハウス）。その軌跡をたどる展覧会「雑誌『オリーブ』のクリエイティビティ」が、金沢21世紀美術館（金沢市）で開かれた。一つの価値観にとらわれない「かわいい」が今に伝えるものとは―。

「オリーブ」は1982年創刊。都会的なファッションやライフスタイル、映画・音楽などのカルチャー記事の特集で10代少女の支持を集めた。同展では、2003年に休刊するまでの全442号のうち434冊のバックナンバーが並び、元編集長のインタビュー記事や読者から寄せられた感想文なども展示されて9年ぶりに「オリーブ」の世界が再現された。

「『オリーブ』は、今の社会の中心にいる30～40代の女性が影響を受けた雑誌。あらためてじっくり読み、その感性の源流をたどりたかった」と企画意図を説明したのは学芸員の高橋律子さん。

バックナンバーに頻出するのが「チープ・シック」という言葉だ。48号（1984年）の特集「全身1万円以内で、おしゃれしようよ。」では、お金をかけなくてもセンスや個性が光るスタイルを提案。単なる倹約術でなく、「知的なおしゃれゲームです」と読者を挑発し、消費社会に迎合せず賢くなれと促した。

「私らしさ」はユニークな「かわいい」を生み、その編集方針は表紙にも反映されていた。ふてくされた表情で当時の女性読者の支持を集めたのが、専属モデルだった市川実日子さん。遠山こずえ元編集長は別の雑誌のインタビューで「（市川さんは）カメラの前で無理に表情をつくらないのが、またかわいい。私たちの〝かわいい〟は世間から少しずれてました」と解き明かしている。

女性はありのまま、誰にもこびず、自分らしさを生かして輝こう―。「もてる」「愛される」といった依存性を迫られがちな現代の女性に、「かわいい」という言葉が本来持ち得る強さと自立性を再発見させてくれる展覧会だった。

文化メモ

▽立命館土曜講座　25日後2時、京都市北区等持院北町、立命館大末川記念会館。安斎育郎・国際平和ミュージアム名誉館長「平和の概念と平和教育のあり方―国際平和ミュージアム20年の軌跡」。無料。立命館大衣笠総合研究機構☎075（465）8236。

▽連続講座「湖の船が結ぶ絆　天智天皇、信長の大船そしてうみのこ」　26日後1時半、近江八幡市安土町下豊浦、安土城考古博物館☎0748（46）2424。滋賀県文化財保護協会の辻川哲朗氏が「琵琶湖運河計画」をテーマに講演する。300円。